

過ぎ去ることへの抵抗 ——アイヒンガーの初期散文作品における「時間」——

久保結菜

イルゼ・アイヒンガーの作品において特徴的なのは、『鏡の物語』(1949)における時間の逆転や、『絞首台の下の演説』(1952)における「死、すなわち新しい生の始まり」といった逆説的な意味付けなどに代表される、時系列に従わぬ語りと通常の判断基準からの逸脱である。こうした「不条理な語り」は、エッセー『この時代に物語とということ』(1952)において掲げられた「終わりからはじめて終わりへと向かって」語る試みの実践と見ることができるだろう。一見矛盾しているかに思われるこの試みであるが、これは、語りの構造や、物語内部の出来事の「始まりと終わり」を重ね合わせることで、直線的な時間軸に対抗する、時間の円環構造を意識させるものであると言える。円環構造を持つ時間においては、出来事同士の位置付けが相対化されることで、それらを原因と結果として整理することが阻害される。すると、出来事のもつ意味すらもが固定し難いものとなる。それゆえに、「通常」の意味付けの規範から脱して、出来事に向き合うものが独自に意味を与えることが可能となるのだ。

アイヒンガーの最初で最後の長編小説『より大きな希望』(1948)はこれまで、47年グループ賞を受賞した短編『鏡の物語』の影に隠れているとされてきたほか、ユダヤ人迫害という事実を「子供に特有のナイーブな視点」から描くことで夢想化しているといった批判を受けてきた。しかし、この作品の語りには、「歴史的出来事」を題材としながらも西暦を秘匿するなどして物語外部を流れる「歴史の時間」に組み入れられることを拒み、視点を目まぐるしく転換させることで読者の立つ地平を揺るがし、出来事の内部へと引き込んでいく効果がある。そして、この作品自体がアイヒンガーの「最初で最後の長編小説」であり、作品執筆の次元でも「終わりと始まり」が重ね合わされていることにも注目するべきであろう。また、物語内部の次元でも、不条理な出来事を前にした登場人物らが、権力を有する側の意味づけを転覆させるような意味づけを行い、絶望的な状況の中で「希望」を獲得していくのである。

『より大きな希望』においては、いかにして「歴史的出来事」とされる経験を時系列に依らずに、出来事の内側へと読者を引き込むように語り、体験するもの自らが意味づけることで希望を獲得するかが示されている。しかし、出来事に対する外からの意味付けを拒むのと同様に、自らが希望の獲得のために行う意味づけも制度化されることのないものである。希望は保持できないものであり、所有するものとしてではなく希望の希求という行為としてのみ可能だということが示されている。この物語は常に新たな希望を目指していく運動を描くものであり、それゆえに『より大きな希望』の名を冠しているのだ。